

## 二つの風土「海の筑前と川の筑後」の福岡

調査研究係 中矢真人



砂 福岡市中島

福岡県は近代以降、数多くの著名な美術家を排出している。博多を中心とした筑前地方と久留米・柳川を中心とした筑後地方は、共に豊かな人脈を誇っているが、福岡県の中身を隣りあった地域ながら美感覚の点で際だった対照的な違いを見せている。

風土一般が芸術一般に及ぼしている、筑前の砂は、さらさらと輝いて「潤達、爽快、明朗」で絵は明るく爽快な筆さばきを見せるのに対して、泥の筑後の絵は微妙で有り濃く、内にこもる象徴的な感覚をたたえている。

このような違いは筑前の児島善三郎と筑後の坂本繁二郎の二人に限らず明治以降の両地域の作家全体にわたっており、筑後排出の青木繁、前出の坂本、古賀春江、筑前の富田溪仙、児島、中村研一らの仕事、これは美を育んだ両地域の中に相異なる固有の何かがあるので、今日でも後輩たちの背後につながっている。

また、坂本は「日本絵画の将来」の中で「美の悟性は生活実感にかゝっているので、創作と風土は絶対的相関関係にある」と述べ、「創作と風土の相関関係はどうしようもない枠組みの中にある」とも述べている。

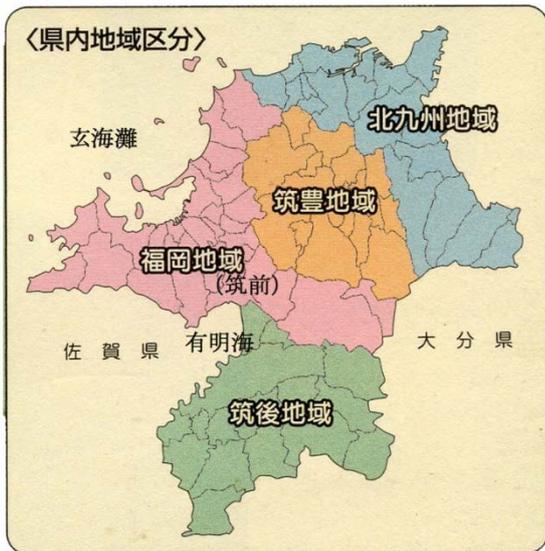
ここで、両地域のイメージとしては、福岡市を要としてマリン・ブルーの玄海灘にパラソルをひろげた弓をえがいた白砂の渚地区を筑前とよび、有明海の暗紫色のうるおいが浸透した、久留米・柳川・大牟田をふくんだ広大な農村地帯を筑後という。

国境の筑後川を挟んでいるものの地理的なへだたりはわずかであるが天候・気質・方言にもはっきりした違いがあり風物景觀に差異がある。

筑前と筑後それぞれの自然風土に着目し両地域の風土を規定する視点を「海」と「川」より具体的には「砂」と「泥」



泥 柳川市中島



におき、また、これを詩人の丸山豊さんは「光る砂・輝く泥」と表現している。

砂は筑前海岸をおおい、泥は筑後川下流一帯に層をなしその地域の風光を特徴づけ、それぞれの美意識と響きあっているのでは。

砂と泥にかかわる多様なイメージを手がかりとした、風土の面から両地域の芸術表現のあり方を比較した「イメージの風土学」福岡県立美術館開催特別展を参考にして一考してみた。

この展覧会は、第一章題材としての風土、第二章表現形態としての風土、第三章表現理念としての風土、第四章風土イメージの現代、の四部構成とし、それぞれの地域の特色を表現し比較考察している。

## 第一章 題材としての風土



夏の日盛(生の松原) 1941 庄野伊甫

身近な風景に心動かされることから、風土と芸術の関わりは始まるといい、その地域の風土の特徴がよく現われている景観を描いた作品が取りあげられていた。

筑前では、筑前海岸の白砂青松が作家の創作意欲をかきたててきた。弓状に伸びた砂浜と磯の岬が緩急のリズムをなして連なり、豊かな松原の帯がそれに沿うように走っている。

「夏の日盛」(生の松原) 庄野伊甫、「博多湾」山喜多二郎太、「松」吉本尚二、「今津・芥屋・雷山」松永冠山等。

筑後では、全国でもまれな景観として知られる有明海や筑後川下流の泥の海、筑後川、矢部川下流域の水路(クリーク)、また晩秋の筑後平野に朱色を放つ櫨の木等が好んで取り上げられた。



下月滞船図(筑後川下流) 1908 青木繁

「筑後川・水縄山」坂本繁二郎、「下月滞船図」(筑後川下流) 青木繁、「櫨紅葉」松田諦晶、「春の海」高島野十郎、「黄櫨」伊藤静尾、「柳河風景」古賀春江等。

## 第二章 表現形態としての風土



弟妹集う 1930 中村研一

風土は風景という題材を作家に提供するばかりでなく、芸術表現のあり方そのものにまで深い影響を与えている。

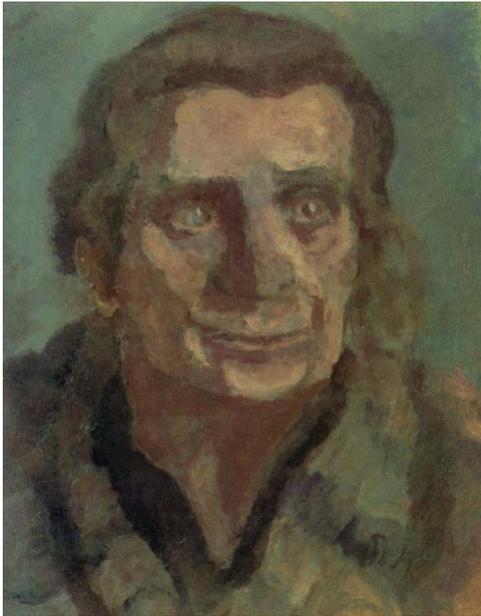
色彩や描線など、画面をつくりあげている要素に、筑前と筑後では対照的な違いがある。

色彩や描線などマチエール上の表現形態において、対照的な特徴を示している。

筑前の作家の作品は、明瞭な配色、明るい色彩、力強い輪郭線、伸びやかな筆さばき、そして理知的な構成感を主要な特徴としている。これらは幾何学的な美しさを見せる海岸線、渚の砂にすっと滲みこむ水の清爽感、寄せて返す渚の澄み切った水、砂の無機的な感触とつながるイメージを与えている。

筑後では、微妙な色調、輪郭線をあらわにしない描き方、くせのある筆致、そして細密な描写を特徴としています。これらは不明瞭な水陸の境、泥の粘り、有機質感、澱んだ水の濁りのイメージと結びついてきます。

中村研一の「弟妹集う」と坂本繁二郎の「巴里の乞食」



巴里の乞食 1923 坂本繁二郎

とを比較すると「弟妹集う」は輪郭線が強く、明瞭であり、全体の色調渋く重厚に描かれている、配色は明瞭であり、また多くの対象が描かれていながらも散漫な感じを与えないのは、極めて理知的に構成されているからである。

「巴里の乞食」では、輪郭線が判然とせず、モノトーンをおもわせるほどの微妙な色調が全体を支配している。それでいても人物の実在感は十分に伝わってくる。

筑前では、「高原の白樺・初秋の陽」梶原貫五、「弟妹集う・床の間の静物・サイゴンの夢・裸体」中村研一、「梳る女・婦人座像」児島善三郎、「階段・寒風」小早川清、「自画像」庄野伊甫、「静物・明日」光安浩光「六月頃」松永冠山、「時雨」今中素友、「鳥・厩舎」伊藤研之等。

筑後では、「巴里の乞食」坂本繁二郎、「収穫（穂屑を篩う）」松田諦晶、「海水浴の女」古賀春江、「泥（B）」伊藤静尾、「放水路の雲・繫馬・松間馬」坂本繁二郎、「櫛紅葉・高良川風景（櫛新緑）」松田諦晶、「遊園地」古賀春江、「朝霧・早春」高島野十郎、等。

### 第三章 表現理念としての風土



ミモザの花その他 1957 児島善三郎

筑前の作品は、明瞭な配色や明瞭な線を描線を生かして装飾性を強める方向に向かい、深刻ぶることのない軽妙でしゃれた感覚は筑前作家たちの眞骨頂であり、こうした明瞭で華やいだ雰囲気は、陽をあびてきらめく砂のイメージや遠く外に広がる海の開放感と結びつきます。

筑後では、微妙な色相や異様なほどの細密さでもって、可視的現実とは別のもう一つの世界を描きだそうとしている。幻想、幽玄、あるいは過去への浪漫的な想いなど、象徴性こそかれらの世界である。現象の深層や背後を見つめる精神は、濺んで溜まった泥に底知れなさや無気味さを覚える感覚に近いところがある。 児島善三郎の「ミモザの花



輪転 1903 青木繁

その他」は筑前のめざす表現理念を極端に示している。テールクロスの朱、花瓶の白、背景の紫が画面全体に鮮麗に配され多彩な色彩と形態に富んだ花の部分に纏まりを与えている。放射状に広がるミモザの花の輪郭線は、細部に気を止めず大きく大胆に描かれ、加えて素早い筆致が絵に軽ろやかさとリズムを与えている。

筑後では、青木繁の「輪転」に表現理念のひとつの典型が現れている。神話に想いを得たと思われるが、太陽の円相を中心に渦巻く光線の中に四人の人物が乱舞の態を呈している、蔭の部分と光につつまれた部分の対比が劇的な効果を生みだし、躍動感あふれる幻想的な世界にさそいこんでいる。

この作品で明らかなおり、可視的現実とは別の世界を創造するところに表現理念がある。

その象徴的世界は、幻想や過去への浪漫的世界に向かい、坂本繁二郎の晩年の能面や月の連作に現れる幽玄の境地となる。

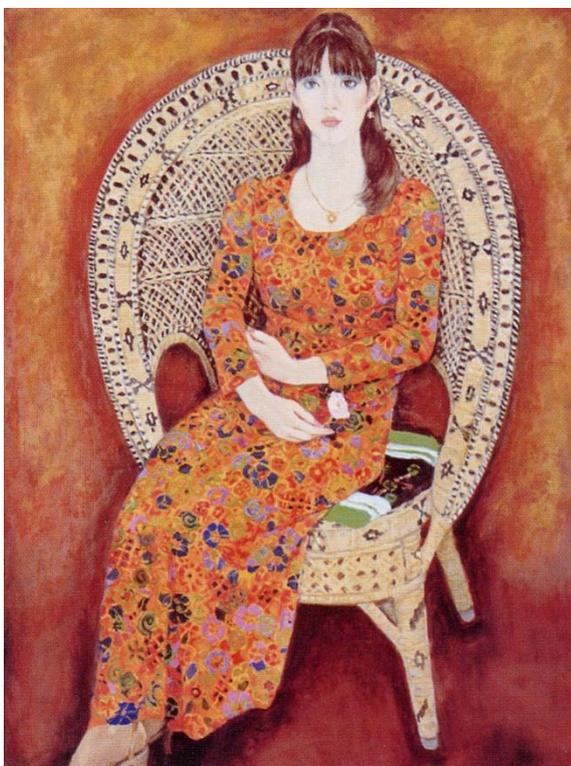
筑前は、「ミモザの花その他」児島善三郎、「蘭亭曲水」富田溪仙、「風景」伊藤研之、「岬」光安浩光、「野・フレンチカンカン」寺田健一郎等

筑後は、「輪転・水浴」青木繁、「月・甘藍・能面」坂本繁二郎、「素朴な月夜・孔雀」古賀春江、「すいれんの池・大樹」高島野十郎、「饗養寺の鐘・文字発生・掛ける」井上三綱、等

## 第四章 風土イメージの現代



モロッコ風景 手島貢



花模様 1980 井上自助

今日交通や情報網などの発達で地域差は縮小の一途をたどっている。また埋め立てや河川の改修などで特色ある自然風土も急速に失われつつある。ここでとりあげた現代作家達は、豊かな風土の中で育った世代に属している。彼らの作品は表現の新しい装いをまといながらもその底流に風土の香りを感じさせる。

最後に、こうして見てゆくと私が所属する福岡支部の歴史と二重写しである。

福岡支部も創設当時は、筑前地区は手島貢を福岡支部長として、筑後地区は井上自助を久留米支部長として、それぞれ昭和二十五年に同時に創設され福岡県内の二地域の支部で発足しました。

両支部は途中支部名称の変更を数度おこないましたが両支部合併時は筑前地区は福岡北支部、筑後地区は福岡南支部の名称であった。

両支部は平成十七年本部の指導もあり合併しましたが、この間両支部で九州創元会展、創元展福岡巡回展、創元会西日本美術公募展、創元会ジュニア展を共同で開催してきました。

今日まで創元展福岡巡回展、創元会西日本美術公募展を毎年開催し、多くの美術ファンに愛されています。

また、一方ではそれぞれ支部展を別会場で独立して開催してきました。

このような活動の中で県内二支部の存在については違和感はなく一度も両支部合併の話は有りませんでした。平成七年法人化に伴い本部から一県一支部との原則で両支部合併の指導が有りましたが、両地区の風土、創設当時のいきさつ等あいまって、両支部所属会員の中で合併の気運は高まりませんでした。

だが、徐々に巡回展、支部展を共同で開催するなどのなかで、風土、習慣、言語を乗り越え両支部長の地道な尽力もあってようやく平成十七年大同合併を果たしました。その

結果所属会員は約九十名の創元会最大の支部と成りました。福岡県は大きく福岡（筑前地区）、筑後、北九州、筑豊、の四地区に分類されています。会員の所属は福岡・筑後地区がそれぞれ約四十名、北九州・筑豊地区が五名程度で、この両地区を含めた会員拡大が今後の課題となるでしょう。

最後に、福岡県立美術館は、前身である福岡県文化会館（昭和三十九会館）以来、福岡県に関わる美術の紹介、県展や展示室の提供による県民の創作活動の支援、そして国内外の優れた美術作品の紹介に努めてきましたが、もともと美術館仕様でないことに加え、時を経て施設の老朽化や狭隘化に伴い、さらには県内に多くの美術館が設置（平成二十年現在一〇館）されたことで、これまで培ってきた県立美術館の独自性が県民に見えにくくなってきた事、さらに近年は文化芸術に対する県民の関心や期待も多様化し、県立美術館は、その教育的使命を十分に果たすことが出来なくなってきた。

そこで、時代に向かい合った新世代の美術館としてその教育的使命を遂行するために、県立美術館は、県立としての役割、福岡県にあることの可能性、美術館であることの任務に立ち返って再構築が急がれている。

この課題に応えるため、福岡県立美術館将来構想検討委員会を平成十九年三月に設置し、新しい県立美術館の必要性や役割を明らかにし、新しい県立美術館が目指す方向性について、その理念や基本方針、機能等を具体的に、「新しい福岡県立美術館のあり方について」として平成二〇年八月報告書提言が行われた。

新美術館が、この報告書にそつてその機能や活動を十分に発揮したとき、福岡県のみならず、日本の文化の文化芸術の振興や発展にとつても、大きな貢献を果たすであろうと記している。

※参考資料

イメージの風土学 福岡県立美術館

創元会六〇年史

福岡県立美術館将来構想検討委員会報告書